

---

# バカとテストと転生人

咲花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと転生人

### 【Nコード】

N6396X

### 【作者名】

咲花

### 【あらすじ】

主人公、凜は神の暇つぶしによって間違っで死んでしまい転生させてくれるという神の言葉に、選んだ世界は・・・？

俺と転生と始まりのお話(前書き)

ども、咲花です

この小説は私の処女作ですので

良くわからないところ、誤字脱字の部分をどんどん指摘してください

お願いしますm( )m

## 俺と転生と始まりのお話

―とある空間―

「んあ？、ここ何処だよ？」

「気がついたようじゃな」

「うわっ！？」

ドコッ、ドガッ、バキッ

「お、お主、なかなか良い腕しとるな  
いやいや、それほども

「まあ、お主に謝らなきゃいけないことがあるのじゃ」

「？、何でだ？」

「ここは俺が謝るんじゃないのか？  
実際ポコボコにしたし

「、、、、お主、記憶がないのかの？」

「む、確かに、少し頭が痛いな」

まるで殴られたような……まさか

「爺い、拉致とは良い度胸だな」

「待て待て！違う、俺が言いたいのはな、」

「俺の手違いでお主を殺してしまったことじゃ」

は？

何を言っただこの爺

俺はこの通り物に触れるし、ピンピンしてる

「信じられないか？最初は皆そういつ」

・・・理解が追いつかない

まず整理しよう

「それじゃ、あんたは俗に言う神様って奴なんだな？」

「そうじゃ」

「んで俺は手違いで死んだと？」

「まあそうなるの」

なら俺は本当に死んだのか？

・・・信じたくはないが

「まあこちらにも非はある、好きな世界に転生させてやろう」

「転生だと？」

「ああ、好きな世界に転生させてやろう」

「うーん。」

好きな世界か、、

どうせなら

「ならバカテスの世界に行けるか？」

「もちろんじゃ、儂を誰だと心得ておる」

「なら早速頼む」

「ああ、待て待て、お前、スキルはどうする」

「スキル？」

スキルって超能力とかか？

それなら、、、

「瞬間移動と投影と後は念力くらいかな？」

「・・・貴様は厨二病者か」

ほっとけ

「まあ良いそれでは行くからの！」

そうして俺はバカテスの世界に転生することになった

俺と転生と始まりのお話（後書き）

とりあえず、無事一話が書けましたw

指摘お願いしますorz

バカと出会いと始まりの宴(前書き)

今回は最初のクラス分けの話です

激短ですw

## バカと出会いと始まりの宴

「おい、遅刻だぞ！」

校門から暑苦しくて野太い声が聞こえてきた

「おはようございます、鉄j・・・西村先生」

「今鉄人と言ったように聞こえたのだが？」

チツ、、、鋭い

「やだな、気のせいですよw」

「そうか、つと忘れていた、振り分け試験の結果だが・・・」

鉄人の持っていた紙を奪い取りビリビリに破いた

「結果は知ってますよ、だって全て白紙ですから」

「俺は府に落ちないのだが・・・お前の実力なら・・・」

「俺はこの学校に勉強に来た訳じゃありません」

きっぱりと言い放ってやった

「???ならどうして入学したんだ？」

どうして?・・・決まってる

「俺はこの学校に戦争しに来たんです」

そう言って俺は校舎に駆け出した

## バカと出会いと始まりの宴(後書き)

次はオリキャラの説明になる予定です

・・・あくまで予定だよ？

## オリキャラ紹介(前書き)

凜の紹介文です

## オリキャラ紹介

遅くなりました、それではプロフィールからスタート

桜我 凜

17才 享年17才

交通事故により死亡、そして転生

顔つきは口調に似合わず男の娘のような顔をしている

召喚獣

武器 ギター

装備 ガクラン 長くて青いマフラー

平均点数400点(ただし本気を出したときのみ)

腕輪&技

音玉 基本攻撃、点消費は無し

値我目六九 技、一人の相手に高速の音玉を5個当てる、10点消費

眼鏡六九 技、周りにたくさんの音玉を放つ 25点消費

真四角世界 技、巨大な音玉を出して爆発させる、50点消費

紙飛行機 腕輪、暫く飛ぶことができ、能力があがる

ついでにオリキャラは後2人出ます、

どうぞお楽しみに

オリキャラ紹介（後書き）

後二人は凜と兄弟設定です

お楽しみに〜

バカと仲間と始まりの出会い(前書き)

更新遅れてましたすみませんm( ) ( ) m

おわびに今回長めです

## バカと仲間と始まりの出会い

さて、まだ早かった気はするけど、まあクラスメートに挨拶しとくか

教室のドアを開けてみると、

ライオンのような赤いたてがみの男が居た、  
つてあれ？見た事あるような・・・

「おう、早いな」

「何だ、雄二か、お前こそどうしたんだよ？」

こいつは元々不良だったし、  
いつも遅れ気味で来る癖に、

「いや、俺はこのクラスの代表だからな、王様のつもりになって見  
下していただけだw」

、、、、うん、コイツはもうダメだな

「それより、お前はなぜここに居るんだ？」

雄二が訊ねてきた

「いや？別にこっちのが楽しそうだからじゃダメか？」

Aクラスなんか居たら息が詰まっちゃうよ  
そんな事考えていると教室のドアが開き

「すみません！遅れちゃいました」

「黙れ、ゴミ虫が」

明久のバカ面も見慣れたもんだな、俺

「って凜と雄二じゃないか、どうしてそこにいるのさ？」

明久はやはりFクラスだったか、まあ予想通りだな

「決まってんだろ？俺がこのクラスの代表だからな」  
と言って雄二と何故か明久がニヤリと笑った

まあ考えつくけどね

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

雄二がふんぞり返って床に座ってる奴等を見下す  
見下すのもしかたない、何故なら

設備がちゃぶ台だからだ、

「えーと、ちよつと通してもらえますか？」

後ろからおっさんの声でした

振り返ってみるといかにも冴えないおっさんが居た

「HRを始めます、席についてください」

ああ、このおっさん、うちの担任なのか

「はいわかりました」

「うーっす」

「へいへい」

三者三様の返事をしてそこらの床に座る

にしても畳は足が痛くなりそうだ

「えー、おはようございます。二年Fクラス担任の福原です、よろ

しくお願いします」

さすがFクラス、チヨークすらないのか

「皆さん、ちゃぶ台と座布団は支給されていますか？」

それにしても酷い設備だ

ちゃぶ台はボロボロ、座布団はほぼ綿が抜けている

実際にクラスの奴等が不備を申し出ても、

我慢してくださいか、自力で直せだからなあ

「では自己紹介を始めましょう」

先生の言葉で一人の生徒が立ち上がる

「木下秀吉じゃ、演劇部にしょぞくしておる」

あれは秀吉か、やはりパツと見女子だよなあ

「・・・土屋康太」

彼奴はムツツリスケベで有名な男、  
運動神経良いのに帰宅部だ、

まあ理由はわかるがな

そんなことを考えていると

「趣味は吉井明久を殴ることです」

そんな声が聞こえた

あれは確か島田だっけな？

そこそこ可愛いのに、何かが足りないんだよなあ

そして視界の隅で震えている明久が笑える

つと次は明久の番か、どんな内容か楽しみだ

「ええと、吉井明久です、気軽にダーリンと呼んでね」

「・・・ダアア・・・リーン・・・」

おえ、酷い吐き気がしてきた

明久も苦笑いしながら、吐き気を堪えている

吐き気を直すため、外に出ようとしたりとき

ピンク色の髪をした女の子がフクラスへ入っていった

あれは、姫路だっけ？

そう思いながら俺はトイレへと駆け込んだ

## バカと仲間と始まりの出会い（後書き）

次回は、Eクラスに宣戦布告する所までやる予定です

## バカと仲間と戦いへ(前書き)

すみません!!!色々あって更新遅れました!!!  
これからがんばります!!!

そういえばアニメ終わってバカテスの人気が冷めちゃいましたね

俺はバカテスが終わったなんて認めんぞ!!!w

小説もバカテス2てきな感じでやってくれるに違いない!!!  
そう信じたい!!!

## バカと仲間と戦いへ

トイレから帰ってくる時、明久と雄二が話をしていた。  
何だろ？遊びの予定か？と思いつつながら、

聞き耳を立ててみると

「提案．．．．．試召戦争．．．みない？」

なるほど、明久は試召戦争を起こす気が、

試召戦争とは、この学校の特別な決まりみたいなもので

科学とオカルトが巧い具合になって偶然出来たシステムらしい

確かにあの設備だと、戦争を起こす理由にはなるが、

そんな理由で明久が動くわけがない

そう考えていると、

「姫路の為、か？」

「ど、どうしてそれを!？」

、、、なるほどな。

ついニヤリと口角をあげてしまった

確かにあいつにあの設備は辛すぎる

だから明久は戦争を起こそうとしたのか、

俺は物陰から出て、二人の側へと寄る

「おいおい、俺も混ぜろよ」

「あ、凜」

「ちよつど良かった、実はな、」

「戦争だろ？聞こえてんだよ」

「そうか、なら話は早いな」

雄二がそこで言葉を切った

俺が言う台詞は一つしかない

「やるならとことんやるうぜ？」

「やった!!協力してくれるの!？」

「ああ、」

、、どーでも良いけど、コイツが喜んでるとなんか腹立つ  
「んじゃ、先生も来たし、教室入るぞ」  
そう促されて俺と明久は教室内に入った

「さて自己紹介の続きをお願いします」

「えー、須川亮です、趣味は、、、」

何も起こらず、淡々と自己紹介が続き、雄二の番になった

「坂本君、君が自己紹介の最後の一人ですよ」

「了解」

先生に言われ、ゆつくりと教壇に向かう様は

普段とは違い、とても代表らしい貫禄が出ているような気がした

「坂本君は、このクラスの代表ですよね？」

先生に聞かれ、うなずく雄二

別に代表だからといってたかだかFクラスだから下手したら恥になりかねない所だが、

それでも雄二は自信に満ちた表情をしていた

「Fクラス代表の坂本だ、俺のことは代表なり、坂本なり好きに呼んでくれ」

さすが馬鹿の集まりFクラス、誰も話を聞いちゃいねえ

「さて、みんなに一つ聞きたい」

ゆつくりと全員の目を見るように告げる雄二

間の取り方が巧いから全員の視線が雄二の目に向けられるようになった

そして雄二の視線は、教室の各所に向けられた  
カビ臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

つられて皆雄二の視線を追って、備品を眺めていく

「Aクラスは冷暖房完備らしいが・・・」

一呼吸おいてから告げる

「————不満は無いか？」

「…………大アリじゃああああ！！！！！！！！！！」

耳をつんざくような2年F組生徒の叫び

「だろう？俺もこの現状には大いに不満だ、代表として問題意識を抱いている」

「そうだそうだ！！」

「いくら学費が安いからと言ってこれは酷すぎる！！」

「大体、Aクラスも同じ学費だろ！？理不尽だ！！」

つぎつぎと怒号のように不満の声があがる

俺もこの設備は酷いと思う

「みんなの意見はもつともだ、そこで」

多分この反応に満足したのか、不敵な笑みを浮かべ

「これは代表としての提案だが、、」

クラスの仲間に自慢の野生味たつぷりな八重歯を見せ

「、、、、FクラスはAクラスに戦争を仕掛けようと思う」

雄二はそう言った

試召戦争の引き金を引いたのだ

**バカと仲間と戦いへ（後書き）**

次回は宣戦布告あたりまで進める予定です

感想、指摘お願いします

前準備―仲間の紹介―(前書き)

はい、更新忘れてました> (―) ( ) <

いつもより長めです

## 前準備―仲間の紹介―

雄二がクラスメートに言い放った言葉、

それは到底無理なことに聞こえた

クラスからも

「勝てる訳がない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらぬ」

そんなやるきの無い台詞が次々とあがる

確かに、うちには姫路もいるが姫路だけで勝つのは不可能に近い

話は少し逸れるがこの学校のテストは上限がない

だから、頭の良い奴は何問でも解く事が出来る

つまりテストの点が強さになるこの文月学園では、頭のいい奴が強い

つまり簡単に言えばAクラスにFクラスが挑むのは愚の骨頂

ありが象に戦いを挑むようなものだ

「そんなことは無い、必ず勝つ、いや、俺が勝たせてやる」

ざわめくクラスにそう言い放つ雄二

「なにを馬鹿なことを」

クラスから否定的言葉があがる

確かに根拠も無きやみんな納得しないね

「勝てる根拠を今から説明してやるよ」

雄二が不敵な笑みをこぼしていった

そして今まさにスカートを覗こうとしている友人一人

「おい、康太、畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に

来い」

「………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

それはムツツリー二だった、

ムツツリー二事、土屋康太は姫路のスカートを覗こうとした際に出

来た畳の後を隠しながら壇上に歩いていった

余談だが明久は手鏡を持っていた、何故だろう？

「土屋康太。こいつがあゝの有名な寡黙なる性識者だ」

「……！！（ブンブン）」

何故かこいつは本名より二つ名の方が有名で、男子からは畏怖畏敬、女子からは軽蔑を以て挙げられる

「ムツツリーニだと……？」

「バカな、奴がそうだと言うのか……？」

「だが見る。あそこまでの明らかなきの証拠を未だに隠そうとしているぞ……？」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……」

たとえどんな状況であろうとも自分の下心を隠し続ける  
但しみんなにもうバレてるんだけどな、

姫路は頭からハテナを出している、

多分ムツツリーニの意味が分かってないんだろう  
ただのムツツリスケベって意味なんだけど

「姫路と凜については説明する必要は無いだろう、」

「私ですか？」「俺か？」

「ああ、ウチの主戦力だ、期待してるぞ」

姫路はAクラス並だ、明久の数倍は戦争に使えるしな

「そうだ、俺たちには姫路さんがいる」

「凜も確かにそれなりに強かったはずだな」

「ああ、彼女さえいれば何もいらぬ」

「凜愛してるぞ！！」

……誰だ、猛烈に変なことだったの

「姫路と凜に迫った異端者を発見しました」

「よし、埋めてこい」

「ハッ、了解しました会長」

ああ、彼奴だったのか、可愛そうに……

「木下秀吉だっているし、当然俺も全力を尽くす」

『確かにやんだかやってくれそんな気がするな』

『坂本って小学生の時神童って言われてなかったか？』

『ならAクラスが二人いるって事か！』

一気に入このクラスの士気が高まっている

『それに吉井明久だっている』

・・・シーーーー

ここで一気に士気が下がった

チイツ！バカ野郎め・・・

「ちよつと雄二！なんでここで僕の名前を出すのさ！？全くそんな  
必要ないよね！？」

『誰だ？吉井明久って？』

「ほら、盛り上がったのに士気に陰りが見えてるし！ってなんで雄  
二達みんなで睨むの！？」

これ以上士気を下げられては困る、

まあ雄二はそんなへましないよな？

「知らない奴には言ってる、こいつの肩書きは《観察処分者》だ」  
言いやがった

『・・・それってバカの代名詞じゃ無かったか？』

そんなクラスメートからの声、あながち間違っては居ないけどな

「ち、違つよつ！ちよつとお茶目「そうだバカの代名詞だ」って肯  
定するな、バカ雄二！」

雄二と明久が言い争っている

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路は小首を傾げている

「姫路はしらねえだろうけどな、観察処分者は主に教師の雑用でな、  
特例として召喚獣が物にさわれんだ」

そういつてやったら姫路が目を輝かせながら

「そうなんですか？それってとても便利ですよね」

実際はそうでもないんだけどな、

「あはは、そんな大したもんじゃないよ」

本当はいろんな制約があるんだが長くなるからまたゆっくり教えてやるとするか

『おいおい《観察処分者》って事は召喚獣とダメージがリンクして  
るって事だよな?』

あ、もうバシてた

つまり召喚獣が痛い思いをすれば、宿主も痛いっていう嬉しくない  
特典つきだからな

戦争ではあまり戦えないことになる

「気にするな、居ても居なくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言つところだよな?」

「フォローされるところあったのかよ?」

さめざめと泣くな、明久

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを制圧して  
みようと思う。皆、この設備に大いに不満だろ?」

『当然だ!』

「ならば全員ペンを取れ!出陣の準備だ!」

『おおっー!』

「俺達に必要なのはちゃぶ台では無い!Aクラスのシステムデスク  
だ!」

『うおおっー!』

「お、おー」

姫路は毛押されながらも腕を振りあげていた

さアてこっからが大変だな、

**前準備―仲間の紹介―（後書き）**

次の次までに開戦させます！

・・・多分

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6396x/>

---

バカとテストと転生人

2011年12月28日15時49分発行